北星女子短大紀要 *Journal of Hokusei Jr. Col. Vol. 35 : 219－225, 1999*

英語のbe動詞の分類と指導に関する考察

Teaching the Verb "BE" to Japanese Students

棚 瀬 江里哉
Eriya Tanase

ABSTRACT

Though the importance of the verb "BE" has been emphasized in English teaching in Japan, Japanese students often make mistakes when using BE. This paper introduces some typical mistakes, and then attempts to explain the different uses of BE, in a way which enables Japanese students to better understand and use it.

Key words: be; copula; existential sentence; communicative grammer

0．はじめに

日本の英語教育において、コミュニケーション重視ということが謳われるようになってきている。文法教育においても、当然文法規則の丸暗記などではなく、コミュニケーションに役立つコミュニケーション文法が要求されるであろう。近年は特にいわゆる「発信型」コミュニケーションが強調されている。文法に関していえば、表現文法と呼ばれるものである。本稿では、be 動詞の表現文法の指導、すなわち、学生が be 動詞の規則を覚えるだけではなく、自分で使いこなせるようになるための分類と指導について考察したい。そのためのアプローチ方法として、筆者が今まで見てきた学生の自由英作文における誤りを手がかりにした。まさしく英語の表現の生の例であると同時に、指導上問題となる点が端的に示されていると思われるからである。

1．be 動詞の指導と日英語比較

文法のペーパーテストの結果を見る限りでは学生はマスターしていると思われる文法事項でも、自由英作文を見ると本当には身に付いていないと分かるものが多い。筆者が見てきた北星短大生の自由英作文の誤りの中でも多いのが be 動詞を間違って用いているものである。実際の例として、

1. ＊ I am a holiday tomorrow.

などがあった。

be 動詞は日本の英語教育では一般的に、一番最初に扱われ、基本中の基本であるのになぜこのように誤りが多いのか。その一つの理由はまさしく、一番最初に扱われ、基本中の基本であることに求められると思われる。つまり、習い始めの時点で主語＋be 動詞という形をたたき込まれるため、一つのパターンとして身に染みついてしまったのであろう。特に、意味もなく be 動詞を付け加える

2. ＊ I'm go to school.

のような例に関してはそうであろう（松井1979:5参照)。上の 1. に関しても主語＋be 動詞という形が身に染みついているということも

無論関係しているであろうが、もう一つ大きな問題がある。学生はおそらく英文を構成する際に、「私は明日休みだ」という日本語を考え、「～は～だ」という形に「A be B」という英語の形を当てはめたのである。

これは、日本語と英語を比較する際によく取り上げられる、

3.a. 僕はうなぎだ。

b. ?I am an eel.

などの例と重なるものである。3.b.は I と an eel の同定関係を表している。

3.b.を用いれば論理的には I = an eel ととられるわけである（「同定関係」やイコールという表現には問題があるが、後述）。日本人が実際にアメリカのレストランで 3.b.と同じ考え方で She is juice.や I am chicken.と言った（そして笑われた）という話も伝えられている（副島 1995:48; 1997:69参照）。

これに対して、3.a.の方は、「僕 = うなぎ」という関係を表すものではない。ここで注意しなければならないのは、3.a.は食堂で用いられる日本語として決しておかしくないのだが、状況、文脈によって、という但し書きがつくことである。一人で食堂に行って「僕はうなぎだ」と言うのは不自然である。何人かで行って、「僕は天丼」「私はざるそば」などに伴うのが自然な使い方である（中野 1982:38-39参照）。この場合の「僕は」は、「(他の人たちと対照して) 僕はといえば」ということであり、(他の人ではなく) 自分について述べているというしるしである。日本語の「～は」は文のテーマを示す働きがある、というのはよく指摘されることであり、「～は～だ」をむやみに同定関係を表す英語の A be B と重ねることはできない。ただし、学生がよく知っている

4.a. 私は学生だ。

b. I am a student.

ならば実質的に同じ論理関係を示している。このパターンが学生の身にしみついてしまっているので 1.のような例が頻出することになる。結局 3.のような構文の指導をするのであれば「これら日英両構文の異同をより明確に認識させる方向に導いていくのでなければならないだろう」（中野 1982:39-40）。その際には日本語と英語における主語の性格の違いが大きな意味を持って来ると思われる。すなわち、日本語では比較的自由に主語を省略できるのに対し、英語では主語は義務的要素であり、無標の場合はテーマである。つまり、英語の方が主語（＝テーマ）と述部（＝コメント）の間に厳密な結びつきが存在するということである。

今までの例は、英語の「名詞句＋be＋名詞句」という構文を問題にしてきたが、もちろん be 動詞を用いた構文はそれにとどまらない。ふたたび学生の自由英作文によく見られる誤りの例を挙げる。be 動詞と深く結びついた存在文に関するものである。

5. ＊ There is my house in Toyohira-ku.

これも「～ある、いる」は there 構文を用いると身にしみついてしまっているため犯す間違いであろう。there 構文は「相手にとって新情報となる人や物の存在を知らせるための文である。...したがって、相手にとって既知であることを示す定冠詞その他で限定された名詞とか、固有名詞が続くことはない」（金子 1991:195）。ここで注目すべきなのは、存在を表す be 動詞を用いた構文と、「新」「既知」のいわゆる情報構造が大きく関わっていることである。英語では文のテーマに既知情報、文の後ろの方に新情報がある方が望ましい、という大原則がある。

6.a. A book is on the desk.

このような英語の文は「可能であるが、ふつうではない。これを自然に言い表すには、文を ...there で始め、従って不定指示の主語（a book）を後方へ移す」（リーチ他 1977:464）。

6.b. There is a book on the desk.

ちなみに

7. The book is on the desk.

ならば問題ないのであって、わざわざ there 構文を用いると誤りになる。

日本人が情報の既知と新を実感するのは困難なことである。これらを学生に実感させ、存在を表す be の有効な指導を考える上でも、日英の比較対照が手がかりとなるかもしれない。6.b.は日本語では「机の上に本がある」、7.は「本は机の上にある」と表しうる(松井 1979:136参照)。「日・英語の存在文の形式上の相違をよくのみこませて、また、どんな情況の時に存在文をつかい得るかを説明すること」が一つの方向性と思われる (松井 1979:143)。いずれにせよ、英語表現としては、主語が定か不定かがポイントである。

2. be 動詞の分類 (先行研究)

次に、英語の be 動詞の分類について考えてみたい。上で取り上げた二つの用い方は「結びつける」(連結動詞) と「存在を表す」(存在動詞) と言って良い。この区分は be 動詞の指導とも関わって多く論じられているが (黒川 1986:42-45、升川 1982:53-56参照)、Halliday は、等式型の be をさらに区別して本動詞の be に3つのクラスを認めている (Halliday 1967:66-71参照)。また、Young は、今まで挙げたような be をすべて連結動詞であるとしている (黒川 1986:44-45参照)。これらの説に関しては、結局どうとらえるかが学生にとってもっともわかりやすい指導につながるか、ということが問題になる。日本の代表的な研究者二人の説を以下で見てから検討してみたい。

(1) 村田 (1984:92-98) の分類

助動詞

・進行形 8.a.The birds are singing.

・受動態 8.b.John was kissed by Mary.

動詞

・絶対的存在。exist と書き換えることができる。SV 型。例外的な用法。

9.a.God is.

・相対的存在。それだけでは意味が完結せず、副詞や前置詞句を付加語 adjunct として従える。相対的な場所規定を受けた存在を意味する。SVA 型。

9.b.John is in the garden.

場所以外の意味合いに拡大されることもある。

9.c.This letter is for you.

copula (連結詞) ――意味内容を持たず、主語と補語を結ぶ機能を持つ

・attributive. 補語として代名詞、固有名詞は用いられず、形容詞が用いられることが多い。主語と補語の語順転倒は許されない。

10.a.Mary is a teacher.

10.b.Mary is intelligent.

・equative. 主語と補語の語順転倒が許される。

10.c.Tokyo is the capital of Japan.

(2) 安藤 (1983:6-13) の分類

SV 型

11.God is.

SV 型ではあるが、きわめて形式ばったスタイル。

SVA 型――文成立のために、SV のほかに付加詞 A を義務的に伴う文型。

・場所規定のA。

12.a.Mary is here.[cf. ＊ Mary is.]

12.b.John is in the house.

場所規定の A をとる代表的な動詞は、存在

の be である。上の各文は、Where is X? という疑問文に答えるものであり、S は旧情報を、A が新情報を伝えている。A を削除できないのはそのためである。

・時間規定のA

12.c.Troy is no more.

SVC 型－－この文型をとる代表的な動詞は、S と C とを「主語・述語」関係に結びつける「連結動詞」(linking verb)

be 「S は C である」という、主語の「状態」を表す（C は、名詞句、形容詞句、及びそれらの相当語句)。S is C.の意味的関係は、特徴づけ (characterization)、同定 (identification)、分類 (classification) の 3 種である。

・特徴づけ：Sの恒久的な性質または一時的な状態の特徴づけをする。C の構造は、形容詞句13.a.、前置詞句13.b.、不変化詞13.c.、「限定詞＋記述形容詞＋名詞」13.d.である。

13.a.That's fine.

b.This letter is for you.

c.Time is up.

d.I am a poor man.

13.b.の前置詞句を場所規定のAととらないのには二つの理由がある。まず意味論的に、形容詞的機能を果たしている (cf.She is in good health.= She is well.)。統語論的には、where と「場所」を聞かれたのに答えるのではなくて、How is she?と「状態」を尋ねる疑問文に答えるものである。

なお、13.d.から記述形容詞を省略すると、「特徴づけ」ではなく、「分類」に属することになる。

・同定：CはSとの同一性を表す (i.e.,S=C)。

したがって、Cは名詞句に限られ、しかも通例、特定的 (specific) である（つまり不定冠詞を伴わない名詞か定代名詞)。しばしば身元確認をする疑問文の答えに用いられる。

14.a.A:What is John?

B:John is Mary's husband.

この用法は同一性を表すので、X is Y.を Y is X. としても知的意味は変わらない (cf. Mary's husband is John.)。

・分類：SはCという類 (class) の成員であることを表す。(分類の代わりに類成員 (class-membership) と言ってもよい。) C は当然名詞句に限られるが、同定とは異なり、通例不定的 (nonspecific) である（たとえば不定冠詞を伴う)。

15.a.John is a teacher.

b. ＊ A teacher is John.

この用法のCは、Sよりも広い外延を持つので、X is Y.を Y is X.と言い換えると論理的に不適格な文が生じる。

村田、安藤、及び Halliday. Young の分類の検討から、be 動詞の指導に関して注意すべき点がいくつか明らかになってきた。まず、equative (同定、等式型) な be とそうでないものを区別すること。つまり、従来の学校英文法でしばしばなされてきたように、Bill is tall.において、Bill = tall と指導するのは不正確であり、誤解を招きやすい。

次に、John is in the garden.を 5 文型の SV とするのはやはり正確ではないであろう (義務的要素を含んでいるので)。ただし、SVA か、SVC か、どう指導するのが分かりやすいか、というのは問題である。Young はこれもSVCであり、is は copula だとしている。なお、黒川は、locative な補語を持つ動詞はcopulaであり、同時に存在の動詞をも兼ねている、としている。この点とつながる、This

letter is for you. の解釈については、村田はSVA,安藤はSVC,黒川は「SVAかSVCかは保留... 文法が確実に分からなければ文が全く読めないというわけでもない」と述べている。筆者としては、表現文法の観点からは、この文をSVAかSVCかに分類するよりも、こういう形の英文が確かに存在しこういう風に用いられる、と指導することの方が重要と思う。

安藤だけが特徴づけと分類を区別している。たとえば、Halliday (1994) は、Paula is a poet. においては、Paula は、poets というクラス(類)のメンバーであり(この点は安藤の「分類」と同じ)、さらに(形容詞を用いた) Sarah is wise. においても同様に、Sarah は wise ones というクラスのメンバーであると述べている。これと関連して、学生の自由作文でよく見られる誤りの一つに

16.a. ＊ My brother is impudence.

などがある。

「生意気＝impudence」と考えているわけである。ところが、これがおかしいということが説明しにくい。I am orange juice. ならば、「君はオレンジジュースなの？違うでしょ。」と言った時点で大体理解するようである。しかし、「弟さんは生意気であるという性質を持っているんだから impudent という形容詞を使うんだよ」と言ってもなかなか納得できないようである。

16.b. My brother is impudent.

この点に関する指導とどう関わるかも問題である。この種の誤りがよく見られることを考えると、少なくとも日本人英語学習者を対象とした場合には、安藤のように特徴づけと分類を区別した方がよいと思われる。

17.a. ＊ My brother is sixth grade.

これも「6年生＝ sixth grade」という考え方は似ているが(厳密には6年生と(第) 6学年を取り違えている)、正しい英文の方が16.b. と違う。

17.b. My brother is a sixth grader.

c. My brother is in the sixth grade.

16.b.の補語は形容詞、17.b.は名詞、17.c.は(補語かどうかという問題はあるが) 場所規定(の拡張) の副詞句である。

3. be 動詞の分類と指導について

誤って用いられた be 動詞の例を再びまとめておく。

1. ＊ I am holiday tomorrow.
2. ＊ I'm go to school.
5. ＊ There is my house in Toyohira-ku.
16. ＊ My brother is impudence.
17. ＊ My brother is sixth grade.

今までの各分類を参考に、表現文法の観点から、学生になるべく理解しやすく、かつ上の各文が誤りであるということがわかるような be 動詞の分類と説明を考えてみたい。

英語の文においては主語は義務的要素であるから、be 動詞を用いた文は原則として「S＋be＋X」という形で表すことができる (there 構文は例外とする。God is.はXが空と解釈する)。ここで注目すべきなのは、Xに入るものと、be 動詞の用い方の分類には対応関係が見られることである。このことを念頭に、以下で be 動詞の分類を試みる。

3．1　助動詞

Xが本動詞であれば be は助動詞である。下位区分が二つあり、Xがing型の進行形と、Xが過去分詞の受動態である。

次に、本動詞 be には存在動詞と連結動詞の二つの下位区分が存在する。

3．2　存在動詞

Xが空の場合は、存在自体を表す特殊な用い方である。典型的な用い方は場所を規定するも

ので、この場合まず主語が定か不定かを区別する。定の場合はXは場所を表す副詞、前置詞句である。不定の場合は there 構文となる。これは形としては特殊で、「there＋be＋不定の主語＋場所」となる。しかしXはやはり場所と考えてよいだろう。なお、Xに場所以外の副詞、前置詞句が入り、比喩的、拡張的に用いられる場合がある。

3．3　連結動詞

まず属性を表すものと同定を表すものに区別される。前者はさらに特徴を表すものと、（ある類の）構成員を表すものに区別される。典型的には特徴の場合Xは形容詞、構成員の場合は不定名詞句である。また、同定の場合はXは定名詞句である。

以上を図に整理してみる。

				(Xにはいるもの)
1.助動詞	i.進行形			ing型
	ii.受動態			過去分詞
2.本動詞	i.存在	a.存在自体		空
		b.主語定		場所の副詞、前置詞句
		c.主語不定		同上（ただしthere構文）
		d.拡張的意味		場所以外の副詞、前置詞句
	ii.連結	a.同定		定名詞句
		b.属性	ア.特徴	形容詞
			イ.構成員	不定名詞句

なお、この分類と上述の誤文とを見比べてみると、

1．Xに名詞句が入るのは同定か構成員の場合なので、間違いであることはすぐ分かる。

2．Xに原型が来ることはない。また、be を助動詞として用いるのは進行形か受動態の場合だけである。

5．主語が定であるから「S＋be＋場所」にすべき。

16.「生意気」なのは弟の特徴なので形容詞を用いる。

17. 弟は6年生（sixth graders）という類の構成員である。もしくは、弟は第6学年（sixth grade）に存在している。

といった説明ができよう。

4．課題

上の分類で大きな鍵となっているのが「定」「不定」という概念である。冠詞を典型として、日本人には理解しにくい厄介な問題である。「定」「不定」を初めとして、それ以外にもさまざまな概念規定を厳密に、かつ学生に分かりやすく、行わなければならない。

今一つの大きな問題点は、本稿においては be 動詞の分類、言い換えれば用い方の差異を中心に扱った。しかしながら、be 動詞に共通する特徴（もちろん、名称以外の）が何かあるはずである。差異だけを見て共通点を無視しても be 動詞の真の姿、全体像はつかめないであろう。統語論的には、たとえば、助動詞であろうと連結、存在であろうと、疑問文においては前置されるという特徴がある。しかし、形式上の規則だけではなく、よりコミュニケーションと結びつきやすい意味論的な共通点を見いだせないものだろうか。認知理論的なモデルに一つの可能性があると思われるが、その検討も今後の課題である。

参考文献

JL = Journal of Liguistics: Journal of the Linguistics Association of Great Britain. London: Cambridge University Press.

安藤貞雄. 1983.『英語教師の文法研究』. 大修館書店.

江川泰一郎. 1991.『英文法解説（改訂三版）』. 金子書房.

Halliday, M.A.K. 1967. "Notes on Transitivity and Theme in English, part 1." *JL*3, 37-81.

_____. 1984. *An Introduction to Functional Grammer*. London. Edward Arnold.

黒川泰男．1986.『英文法再発見――コミュニカティブ・グラマーへの道（上）』．三友社出版．
G.リーチ・J.スヴァルトヴィック．1977.『現代英語文法――コミュニケーション編』，池上嘉彦・池上恵子（訳）．紀伊国屋書店．
升川潔．1982.『使える英文法へ－－教えるヒント・考えるヒント』．開隆堂出版．
松井恵美．1979.『英作文における日本人的誤り』．大修館書店．
村田勇三郎．1984.『文(1)』，講座・学校英文法の基礎７．研究社出版．
中野道雄．1982.「発想と表現の比較」，『発想と表現』日英語比較講座４．大修館書店．
副島隆彦．1995.『英文法の謎を解く』．筑摩書房．
――――．1997.『続・英文法の謎を解く』．筑摩書房．